

「いままで見えなかったものが見えてきた」 M君の場合

埜 誠一郎

目次

- 1) 動機
- 2) インタビュー
 - 2 - 1 絵は一生の親友
 - 2 - 2 多聞塾
 - 2 - 3 52歳のとき
 - 2 - 4 仏教とのご縁
 - 2 - 5 剃髪得度
 - 2 - 6 挫折を知らないものは人生の醍醐味を知らない
 - 2 - 7 いままで見えなかったものが見えてきた
- 3) 結論
- 4) おわりに

1) 動機

私は、今回の課題である「身の回りにいる私にとって魅力ある人」のインタビューの相手として、大学時代のクラスメートである M 君を選んだ。

彼は、私の世代の多くのサラリーマン男性と同じように、伝統的な終身雇用制の中で、大学卒業と同時に、末は社長か役員かと青雲の志を抱いてある有名会社に就職した。入社後も、社内で自分の能力を十分発揮出来る場を与えられ、次々と実績を重ねて上司にも認められ、順調な出世街道を驀進していた。ところが、52歳の時、突如、他社への転籍を命じられた。彼は、第二の会社に移って間もなく、また唐突に仏門に入り、修行を重ねついに剃髪得度した。

彼は、学生時代陸上部に属するいわゆる「体育系」であり、井上靖の小説を好んで読んでいたものの、哲学、宗教にはおよそ縁が無さそうに見えたので、そのニュースを聞いたとき、われわれは一体彼に何があったのだと本当に驚いた。彼は、その後もサラリーマン生活を続け、昨年、第二の会社を定年退職した。現在は、仏教を語り合う座談会形式の勉強会を主宰する傍ら、少年時代が

らずっと好きだった油彩の筆をとりつづけている。

「第二の会社へ入って仏道修行に励み、新しい会社の仕事にも慣れて、ある夏札幌へ出張した折、アスファルト道路の道端に咲くタンポポをみて、道路の割れ目に咲くタンポポが畑のタンポポを羨んだり、畑のタンポポが道路のタンポポをお前はいつ人や車に踏みにじられるかわからないよなどと軽蔑したりしていない。それぞれ生かされている命を、生かされている間は一生懸命咲き続けている。自分の人生の歩みは無数の縁によって導かれているのだ。自分の力だけで、ここまで生きてきたと思っていたが、なんと傲慢なことであったと気づかされ、恥ずかしくなった。」

と、彼は、ある雑誌に書いている。

彼は、「最初の会社にいたとき、人生の価値はひとより早く、よりいい地位に着くことである、自分さえよければと思っていたが、とんでもないことだった。第二の会社に来て、自分の部下が地位や金の為でなく営々として働いているのを見て、ひとは独りでは生きられない、不平不満を言わず、どんな環境にあっても与えられた仕事を一生懸命やらねば、一度限りの人生がもったいないと思った。」と、クラス会に来て語ったことがある。彼の人生観はすっかり変わっていた。

彼は、会社生活の中で深刻な挫折を経験したとき、自分をごまかさず、立身出世主義に固まったそれまでの考え方、生き方を冷静に反省し、仏教と仏道修行によって人生をじっくり見つめ直して、新しい価値観を獲得した。私はその真摯な内省の態度、決断と行動力に魅力を感じ、もっと深く彼を知りたいと思い、今回のインタビューの相手として選んだ。

2)インタビュー

日時;11月1日(土) 午後6時から10時

場所;K画廊およびM君自宅

絵は一生の親友

まず、M君の自宅近くのK画廊で落ち合って、M夫妻と夕食を共にしながら歓談した。この下町の画廊では、ちょうど今日からM君の個展をやっていて彼の油彩二十数点が展示されていた。殆んどが長野、山梨、北関東の山々とふもとの静かな山村の風景だ。インタビューの宿題をすっかり忘れて美術、旅行談義にしばし時を過ごした。

- 君の絵を見るのは久しぶりのような気がする。もう十数年前に東京交通会館で個展をやった時以来かな。相変わらず、山の絵ばかりだね。僕も10年以上写真をやっているがうまく撮れたと思うことは年に1,2度かな。風景写真が好きで、気に入った光が来て、気に入った色合いに

なるまで辛抱強く待つのが勝負だ。写真は切り取りの芸術と言うけど、絵もそうかな。

M) うん、光の芸術と言う点ではそうだと思うよ。僕は、木曽地方のある山の裾野に、廃屋を買ってアトリエがわりにしている小さな小屋を持っている。だから、いい光線を待つ時間的な余裕があるというか、我慢強く待つにはいい条件だけだね。そこへ春、夏、秋、冬、と毎週末通って少しずつ絵を完成していくのが何よりの楽しみだよ。

- それは羨ましいね。ところで絵はいつ頃から始めたの。

M) 小学校の時、「M君は絵が上手いね」と誉めてくれた先生がいてね。それまでは算数と体育が得意な田舎の小学生だったけど、それから先生に誉められたいという一心で絵を一生懸命に描いた。学校の先生の一言で人の人生が変わる事もあるから君なんか気をつけたほうがいいよ。実は、今日夕方まで、川口の中学校の時の美術の先生を見舞いに青梅の老人ホームまで行ってきたのさ。その先生は当時30代だったと思うけど、芸大を6,7回受けても受からず更に挑戦をしていた。そこで僕は美術学校の最高峰、芸大と言うのがあるのを初めて知って、じゃあ自分も行きたいというわけで、その先生に、特別に週1回課外授業で絵を指導してもらっていた。

- あれ、君は福島出身じゃなかったっけ。

M) うん、白河からバスで2時間半くらい山に入った田舎さ。中学2年生の時、長兄につれていかれた川口の中学校で壁に貼ってあった絵の上手いF君(彼は後有名なデザイナーになった)の絵を見て、都会にはこんな絵のうまい奴がいる。井の中の蛙では駄目だ、福島の片田舎には絵の修業が出来ない、東京かその近郊にこなければと翻然決意して、夏休みに故郷へ帰らず、そのまま埼玉の中学へ転校した。3年のとき、埼玉中学校展に入選、「大胆なタッチ、将来が期待される」との批評を貰い益々のめりこんで行った。それからずっと18歳の時まで、僕は芸大の洋画科が志望だったんだ。

その後東京都の高校に入ったが底辺校だったので一年で進学校へ転校、そこでは、受験勉強一本やりで、皆一流大学進学を目指していて度肝を抜かれた。三年のとき、「X大に入っても絵は描けるぞ」との先生の一言で、芸大受験を翻意しX大志望に転向した。だが、それまでは芸大めざしてデッサンに励んでいて準備開始が遅かったためあえなく二浪。三回目も失敗して、Y大へ入った。

Y大では数学がいつも満点で、予備校で鍛えられたお蔭で英語も得意だった。教授は「M君何故辞めるのか。将来君には是非大学に残ってもらいたいとも思っている。」といわれたが、それを振り切って、1年で退学し、背水の陣を敷いてX大を再受験し、ひとより三年遅れてやっと合格した。

- X大時代の君と言えば、夕方暗くなるまで運動場を走ったり、ハンマーを投げたりしていた姿

がすぐ目に浮かぶけど、絵の方は大学から会社へ入るまで余りやっていなかったのかな。

M) うん、そうだね。会社へ入ってからは2,3年毎に東京本社勤務と地方勤務を繰り返していたから、長野、北海道、新潟など地方勤務の時はよく絵を描いていた。1971年に今の所に初入選して、その後、会友、準会員を経て、会員になったのは1988年だよ。

● 絵は君にとってどういう存在と言えるかな。

M) 絵は一生の親友といえる。会社での浮き沈みや家庭での喜怒哀楽に関係なく常に僕の身の周りにいた。時々疎遠になったり、うまく描けなくていやになったりすることもあったけど、常に自分の喜びのもとであり、慰めのみなもとでもあった。芸大には行けなかったけれど、これでも絵描きの端くれだよ。((注);平成10年日本美術家連盟会委員)手が動く限り、死ぬまで描き続ける積りだ。

「絵は一生の親友」とはいいことばだ。彼の場合、絵とのめぐりあいが人生を左右して来た。それに彼の迅速な行動力には敬服する。中学校2年のとき、F君の絵を見て夏休みが終わっても故郷へ帰らず川口の中学校へ転校したこと。18歳のとき、芸大志望を止めてX大志望へと変更し、受験勉強一本やりに転身したこと。Y大を1年で退学して、X大に再挑戦したことなどに見られる思い切った決断と行動力。この行動力はサラリーマン時代、剃髪得度して仏道修行に踏み切ったことにもつながるものだ。

夕食後、彼の自宅へ移動し、録音しながら会社時代の話聞くこととした。

多聞塾

● 最近はどう過ごしているの。

M) 今年の6月に第二の会社を退社した。40年間のサラリーマン生活に別れを告げて、今は、5年前から仲間と続けている「多聞塾」と言う勉強会を主宰しているのと、月2回程度近所や知り合いの仏事でご奉仕している。「多聞塾」は、職業身分を問わず人生を語れる人を呼んで来て、みんなでお話を聞いて意見を交換する会合でもう50回やっている。

52歳の時

● ところで、A社にいた52歳の時、B社に突然出向を命じられたんだよね。

M) いや、出向じゃないよ、退社して転籍したんだ。先輩の人事部長に呼ばれた時はとてもショッ

クだった。もう、この会社で上へ行く可能性は断たれた。もう俺は会社にとって不要の人になったんだってね。「挫折」ということかな。

僕は25歳でA社に入社してから二十数年間一生懸命仕事して来てそれなりの成果もあげた。50歳の時には、トップ自ら指揮する経営改革の最後の仕上げとして、末端業務のコスト単価を出すと言う大仕事に、特命部長のプロジェクトマネージャーとして抜擢された。全社から集められた優秀なメンバー30名が提案して来た最終案に自分の智慧も入れ込んで、社長に説明に行ったら、「仮免だ。この考え方で、コンピュータに乗せ、検証せよ。」と言われた。この「原価管理システム」の有効性が実証され、いよいよ全国展開しようとした矢先、この社長が某社未公開株事件で失脚してしまった。

関係の幹部も退社し、そのとばっちりかどうか分からないが、自分も他社行きを命じられた。人事部長は、「B社から名指しで君に来てほしいって言ってきたが、どうかね。」ってさ。

彼は出向だとばかり思っていたが、出向と転籍じゃ大分違う。彼の場合、52歳まで「挫折」を全く知らないと言うわけではなく、表面に現れたものだけでも、高校・大学受験でかなり挫折している。「挫折」を知っていてそれを乗り越える術も知っているはずなのに、転籍を命ぜられてうろたえたと言うのは恐らく正直な気持ちだったろう。

自分の場合を振り返ると、47歳の時、業界団体へ出向を命ぜられた時は本当にショックだった。もうこの会社で上へ行く可能性は断たれた。もう俺はこの会社では要らないんだとガッカリした気持ちは彼と同じだ。業界他社から来た10名のメンバーと業界の委員会で学者や隣接業界の人と議論したり、欧米に出張に行ったりして、それなりに仕事は忙しく面白かったけれど、島流しにあった感はぬぐいがたかった。部長待遇にはなっていたけれど、2年間の筈が、諸般の状況で3年になり、4年になって、その間、同期生や1、2年下の優秀な仲間達が、大支店の支店長や、主要部の部長、更に取締役昇進するものも現れた。もちろん今まで誰にも言ったことはないが、もし当時の内心を解剖して見たら、羨望、嫉妬、劣等感、焦り、会社の人事評価への不満、そして、最後は諦めが渦巻いていたに違いない。

私の場合は、その後会社に戻り、3年間部長職を勤めた後、その当時ちょうど55歳定年制が60歳まで延びかけていたが、54歳の時、再び外資系の会社へ出向を命じられたときは、いわゆる「片道切符」であり、余りショックはなかった。

- B社に行ってからの仕事振りはどうだった。

M) 1990年4月、B社に入って、営業副本部長、翌年理事・営業本部長になったが、セールスはかつての人脈を生かし順調そのものだった。「人生を三度生きる」と言う座右の銘で自らを励まし、

前向きに生きようと努力していた。頭では「人生七転び八起き」とわかっていたが、時折俺はどうしてこうなってしまったんだという憤りやどうしようもない寂寥感がこみ上げてきた。A社に残って、役員になった同期生と比べて、私のどこが悪いのだという思いから来る挫折感、敗北感がいつまでも消えなかった。

- われわれが会社に入った40年前からつい10年くらい前までは、一生同じ会社に勤めるのは当たり前、自分から辞めるのは「おちこぼれ」、途中で辞めさせられたり、出向を命じられたりするの「敗北」だった。もちろん、明治時代の立身出世主義とは全く違うけれど、男が会社での地位が上がって、多くの部下を持ち、より大きな権限で幅広い仕事ができるようになるのを望むことは、当時としては決していけないことでも馬鹿らしいことでもないと思っていたよね。高度成長時代のビジネスマンはみんなそうだった。ただ、上昇志向の度合いは人によって違うだろうがね。君の場合はどうだった。

M) 僕の場合、その当時は「男の価値は、会社での地位によって決まる。ビジネスマンとしての矜持、そして、日頃の努力の成果は、職位、ポストの序列にありと言う人生評価法で、同期生より、一日でも早くよりいいポストに付きたい」と思っていた。A社で役員になり、関係会社社長で出たいと思っていた。今から考えると全く誤った人生の尺度だけれど、当時は、仕事をうまく進めるより、どうしたら出世出来るかと言うことに汲汲としていたような気がする。家にも会社のことばかり考えていたし、家内にも休日でもいつもぴりぴりしていたと後から言われたよ。

仏教とのご縁

- 振り返って見ても、確かに僕等の世代は30代後半から50代にかけては良く働いたよね。ところで、仏教との出会いはその頃かい。何故仏教に興味を持ったの。

M) うん。B社に移ってから2年間くらい表面上は明るくふるまっていたが、心の中には、暗く鉛のように重い気持ちをかかえていた。これでは、暑い夏の日も毎日客先を飛び回り、汗水たらしているセールスの皆さんに対し申し訳ないと痛切に感じた。

1993年、会社の絵のグループの先輩でもあった人の紹介で思い切って東京国際仏教塾の門をたたき、通信教育、土日の座禅、作務、読経等で仏教の基礎を修学した。ここでは、日本の仏教各宗派がそれぞれの教学と修行を教えてくれた。

1年間はあっという間に過ぎ、私は釈尊の教えにこそ人生のよりどころがあると感得し、更に仏教を深く学びたいと、浅草にある東京本願寺学院(夜学;月曜から金曜まで毎日午後6時から9時まで)に通うことを決心し、剃髪得度した。まあ、挫折の悩みから頭を丸めたとはいえるのかな。

何故真宗だったかと言われると、家の宗教だったと言うこと、『出家とその弟子』などを通じて親鸞さんに親しみを持っていたからだ。

剃髪得度

- よく剃髪得度って聞くけど、これはどういうことなの。

M) 剃髪は髪をそって丸坊主になること、得度は仏門に入ること。昔は出家と言って俗世間の縁を全て捨てて、仏教に志すことを剃髪する事で表現した。親鸞さんは、家庭を捨てなくてもいい、そのままでもいいと言ったけど、それでは、その人の内心が外側から分からないから、剃髪する事で、自分は仏教の修行をする決意を固めたと言うことを表すわけ。剃髪した時は、頭が真っ白になり、涙が出そうになるのをやっところえたよ。

- 頭が真っ白になり、涙が出そうになったと言うのはどう言う気持ちだったのだろうか。

M) もう戻れない、ここまで来てしまったと言う思いだった。また、よくここまで来たと言う思いかもしれない。

坊主頭で始めて会社に行った時は皆びっくりしていたよ。でも、会社も温かく迎えてくれたし、部下も良く理解してくれていたと思う。営業本部長の身での通学は予想以上に辛かったが、幸い、上司、同僚諸氏の支えがあって 2 年間の課業を全うすることが出来た。学院でのお話は身体に、心に染みとり、自分が次第に変化して行くのを実感していた。

挫折を知らないものは人生の醍醐味を知らない

- M君にとって「挫折」はと言う意味があったと思う。

M) 人生が自分の思うようにならず、深く傷つく時が「挫折」なんだろうけど、当人にとって見れば、文字通り人生の終わりと言う絶望感だよ。特にわれわれ世代のサラリーマンは一度失敗すればリカバリーややり直しが一切きかないと当人も、周りも考えるような時代だったから、深刻だった。でも、「挫折」はあとから振り返って見れば、この世の終わりでもなんでもないし、「挫折」を知らないのは、人生の醍醐味を知らないとさえいえるね。ひとは挫折した時、人生にとって大切なものは何か考え直し、価値観の転換だって必ずあるさ。そこで新しい自分が生まれることもある。

私の場合、青年時代から壮年時代にかけて、小さなガッカリはたくさんあったが、最初のおおきな「挫折」はやはり47歳の時の出向命令だろう。当初は自分が惨めに敗北したことを認めたくないから、本当は、自分の生き方、考え方に責任があるのに、上司のせい、周りのせいにして一人でひ

がみ他人を羨んでいた。4年間出向しているうちに、悔しさも残念さも段々薄れ、まあこんなものかと自分をごまかしていたのかも知れない。

出向していた4年間に何をしていたか振り返ってみると、その時期に日本語教師養成講座や日本語教育能力検定試験を受けた。その当時は、別に定年になったら日本語教師に転身しようなどと言うことは全く考えてもいなかった。ただ、多少時間に余裕が出来た事と、ことばに興味があったからだったと思う。でも、2000年3月に定年になってから、2,3の先輩から俺の会社に来ないかと誘われたが、結局、2001年1月から日本語教師養成実習コースに通い、その後中国に2年間滞在し、今ここにいるのもこのときの出向の縁が結果的に転機になったといえるのかもしれない。

いままで見えなかったものが見えてきた

- 「ひとは「挫折」した時、人生にとって大事なものはなにか考え直す。価値観の転換だって必ずあるし、新しい自己を確立する」に関連して、「挫折」を転機として、価値観が変わったとか、ものの見方が変わったと言うことは例えばどんなこと。

M) ある夏、北海道へ出張した時、歩いていてコンクリートの道路わきのタンポポが急に見えてきた。今まで、目には入っていたんだろうが、見えている意識がなかった。心を澄ますといままで見えなかったものが急に見えて来ることがあるんだね。道端のタンポポは、畑のタンポポを羨ましがらず、畑のタンポポは道端のタンポポを軽蔑する事もなく、自分の持ち場で一生懸命生きていることが実感され、これがお浄土だと思ったんだ。人が話す言葉の端々にも、ちょっとした言動にもいままで見えなかったものが見えてくることがある。それでも修行がまだまだ足りないから、いま自分に見えていないものも世の中に沢山ある。人生では会社における地位とか、金が大切なものではなく、自分のあるがままを受け入れ、その持ち場で力を尽くしていく事が、人間として最も尊いことだと悟ったんだ。

それまで見えないものが見えてきたと言う話でふと思い出した事がある。

10年くらい前、マクロレンズを買って初めてデンファレ(蘭の一種)の写真を撮りに行った時、デンファレの花の筋、色合いや陰が鮮明に見えて感動した事がある。その時撮った写真は私の「生涯10枚」の一つになっている。「気持ちが変わればそれまで見えなかったものが見えて来る。」は、普通のレンズに代えて、マクロレンズを付けたカメラみたいなものだ。彼の「まだまだ修行が足りないから、目に見えていないものがこの世に沢山ある。」は謙虚な態度だ。

インタビューを終えたあとで、一番強く印象に残っているのは、人生の節目節目での彼の素早い決断と行動力である。中学校2年のとき、F君の絵を見て夏休みが終わっても故郷へ帰らず川口の

中学校へ転校したこと。18歳のとき、芸大志望を止めてX大志望へと変更し、受験勉強一本やり
に転身したこと。Y大を1年で退学して、X大に再挑戦したことなどに見られる思い切った決断と行動
力。この行動力はビジネスマン時代、剃髪得度して仏道修行に踏み切ったことにもつながるもの
だ。

もちろん、自分は「自分」であって、決して「他人」ではないから、M君を羨ましいとも、自分もそう
した方がよかったかなどとも毛頭考えない。ライフ・スタイルなどと言う実態のはっきりしないものに、
魅力を感じることも無いし、内面の心の動きなどは、夫婦だって分からないだろう。

たまたま、彼の自宅の近所にある下町の画廊で今日から個展が開催されていて、20余点の油
彩を一緒に見たが、若い時一時芸大を志望しただけあってくろうとはだした。今月中旬からネ
パールへ仲間と絵を描きに行くそうだ。

3) 結論

- 挫折を知らないものは人生の醍醐味を知らない。

「挫折」とは受験、就職、恋愛、結婚、家庭、職場等々人生のいろいろな場面で、自分の思うよう
にならず敗北感を抱くことであると思うが、サラリーマンの場合、やはり、組織内で自分の意に染ま
ない処遇(仕事や地位、収入)を与えられたときに挫折を感じる人が多いだろう。挫折といっても、
本人の感受性や人生観によっても、一過性のものであれば、深刻なものもある。その時に、どう言
う態度を取るかで、その後の人生が決まってしまう例も少なからず見聞きして来た。がっかりして仕
事を真面目にやらなくなったり、ふてくされたり、要領だけでいい加減な仕事をするようになったりし
た会社の先輩、同僚も多く見てきた。

彼の言う通り、「挫折」は後から振り返ると人生の終わりでもなんでも無いし、いつも順風満帆で、
「挫折」を全く知らないのは人生の醍醐味を知らない。人は挫折したとき、人生にとって大切なもの
は何か考え直す、価値観が変われば新しい自己がきっと生まれるというのはその通りだと思う。

- いままで見えなかったものが見えてきた。

彼の新しい価値観、自分のあるがまを受け入れ、その持ち場持ち場で全力をつくすことと言
うのは一見、現状維持的で、迅速な行動力と矛盾するかのようであるが、この境地は、仏道修行への
決断と行動力の結果得られたものだ。「いままで見えなかったものが見えてきた」ということばは価
値観の転換によって彼の切り開いた新たな心的境地を示すものである。

私も、どんなに卑小であっても自分のあるがまを受け入れ、どんなところでも与えられた場で力

を尽くすことが肝要だと言う考えに共感する。そのように考えが大きく変わったのは、私の場合もやはり、47歳の時に出向したときだ。その意味で自分の場合も「挫折」によってそれまでの人生を見直し、価値観の転換によってそれまで見えていなかったものが見えてきた事を実感した。

M君だって別に悟ったわけではないだろうし、時々迷うこともあると思うけれど、仏道修行によって気持ちのゆとり、心のよりどころを得たと言うことが、自分にはM君の心的境地は完全には分からない。でも、彼の人生における、思い立ったらすぐやる行動力と、挫折したとき、悩みに押しつぶされたり、自分をごまかしたりしないで正面から対峙した姿勢は偉いと思う。そんな迅速で率直な行動力が結局彼の魅力なのだろう。

4. おわりに

3ヶ月前、この授業が始まったとき、なぜこの授業が「言語文化」が良く分からないままに、とにかく自分の身の周りにいる魅力ある人物にインタビューして作文を書くことを迫られた。少年時代の憧れと言えば、なんといっても巨人の背番号16、川上哲治選手だが、そういう手が届かぬ人でなく身の周りにいる人と言えば現実に口を利いたことがある人だから、はたと困った。既に鬼籍にいる大先輩や外国駐在中の畏友はだめ、ずっと短からぬ半生をさかのぼっていくと、学生時代のクラスメートM君が浮かんだ。大会社に勤めながら、50歳過ぎて突如仏門に入った変り種、読む人にも面白からうと白羽の矢を立てた。

まず「動機」でM君のことを書いて出したが、「あなたがM君のどこに魅力を感じたのかさっぱり見えてこない」、「自分の問題として捉えていない。」などとの指摘を受けた。はて、いま毎日のように会っている人ならともかく、1年に1、2度会うか会わないかの旧友の全てを知っているわけじゃなし、何か彼のエピソードを書いたらどうかとかそんなことを言われても困ると思ったが、詳しいインタビューを報告すれば彼の魅力もきっと分かってもらえると思った。

家に帰って録音を聴きなおしながら、彼の話自分をどう受け止めたか、自分の場合はどうであったかを内省し、サラリーマン人生の転機だった47歳の時の出向命令を深く考え思い切って書き記した。ところが、クラスに出たら再び「レポーターとして冷静に対象者を眺めているようで、インターアクションが殆んどない。インタビューは自分の考えや経験を話しながら対談形式で行うのが望ましい」、「2人のサラリーマン物語を並行して聞いているようである」、などとまた厳しい指摘を受けた。自分が一生懸命挫折した時の自分の気持ち、彼の話聞いた時の考えを率直に丁寧に説明しているのに、他者が分かってくれないもどかしさと苛立ちを感じた。

そこでじっと考えながら急に思い当たったのは、自分が書きたかったのはM君の半生記ではなく、M君の魅力は何か、それと自分の関係はなにか。それを他者に分かるように書くことだということだ。自分がM君のどこに魅力を感じたのか、それはなぜかをしっかり掴んでいないと、インタビューもそれを報告したクラスでのディスカッションも焦点がぼけてうまく行かない。と言うことは結局出発点の「動機」で自分の立場をしっかり掴んでいないとその後がふらふらする、自分が揺れ動く、他者に

は益々わからなくなると言う悪循環に陥る。インタビューが大事ではなく、自分がこの文章を書きたいと思った、M君の事を人に伝えたいと思った内心の強い気持ちが大切と分かった。

人に自分の考えを主としてことばで伝達するのがコミュニケーションの基本、そのためには自分の考えを未熟でも、間違っていてもいいからしっかり考え抜いた上で、他者に明らかにすること。次に、他者とのインターアクションによって自分の考えが変容し、深化していくことを前向きに受け取る。このクラスで他者から厳しい指摘を受けたことは、「自分の考えていること」を鍛えあげることにはならない。

教室内外の同じような「日本社会」に生活しているといっても、接触する個人個人が背負っている社会や文化はそれぞれ皆違っているから、コミュニケーションは容易な事ではない。場面場面において、我慢強く自分の考えていることを他者とのインターアクションによって鍛え、ことばでしっかり伝えて行くことが自分にとって「日本社会にくらすこと」である。それは思考と表現の活性化によって国籍、性、身分、信条、その他あらゆる皮相的な差異にかかわらず他者と積極的に関わりあっていくことでもある。